

单身者たち

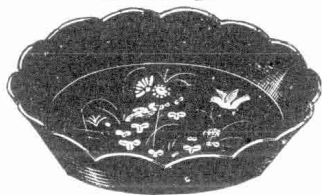


多田尋子

tada hiroko



单身者たち
tada hiroko
多田尋子





多田尋子（ただ ひろこ）
一九三二年、長崎県に生まれる。
日本女子大学国文科卒業。「白い部屋」にて第九六回、「単身者たち」にて第一〇〇回芥川賞候補となる。

単身者たち

一九八九年二月一日 第一刷発行
一九八九年六月五日 第二刷発行

著者 多田尋子

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二丁目二八
番二〇三 電話〇三〇三三〇一・二二三一
振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

製本 小泉製本

平版印刷 栗田印刷

（落・乱丁本はお取替えいたします）
（定価はカバーに表示してあります）

单身者たち
目次

卒業展

185

夫婦

131

白い部屋

75

単身者たち

7

裝丁菊地信義

单身者たち

单身者たち

団地のなかにある停留所から乗ったバスは、冷房が強いきいていた。うちを出るとき窓をしめたり冷房を切ったり入口のドアの施錠を確かめたりしてから五階分の階段を降りてくるうちに、部屋で冷やされていた自分の体が、少しずつ外気と同じ温度にあがっていくのがわかる。建物の昇降口から外に出て、日傘の陰のなかをバス停まで歩いたが、そのあたりでもう目がくらむように、バスのくるのを待っているあいだに、化粧した顔に汗がにじみ出て、拭きたいけれども拭いたらせつかくの化粧もとれてしまうと我慢しいしい、ようやくきたバスに乗ることができたのだ。

いつもの日よけの帽子では真夏の午後の熱気のなかへ買物に出かける気にはなれず、母を慰めるつもりで買ったのに結局母はさすことができなかつたこの地味な日傘を、思い出してさしてき

たのだった。帽子では頭と顔しか陰にならないが、傘だと円筒形の陰に自分の体をいれて動けるので、頭にだけ帽子をかぶって肩も背も足も光に炒りたてられて歩くよりはよほど楽だった。これまで、日傘をさして歩く人たちのことをばかにしていた。いかにも野暮ったく思われたのだ。もう四十をすぎているというのに、母と二人だけの暮しでは娘の立場にしかたてなかつた。しかしいつの間にか、野暮ったく思われるのはいやだと思わなくなっていた。楽なのもともとありがたいと思うようになっていた。長いあいだの看病と、いつも一緒だったその母に死なれて、もう何でもどうでもよくなっていた。

バスとかスーバーとかで、強い冷気を皮膚が感じたときはいつもちよつと表皮だけがふるえるように引きつる。露出している顔や腕が鳥肌になる。髪のはえている頭の皮も引きつっているのが自分にはわかる。冬の寒さのときの鳥肌とは少しちがうようだ。いきなり、そして一瞬という感じで、やがてすぐそれはゆるんでほつとしたような気持になる。

四つ目の、駅前西口が終点だった。午後の強い日ざしが、バスターミナルのアスファルトの広場にはね返ってまぶしく、普通に目をあけていられない。ここから、西側の奥深くまでひろがっている新興住宅地や公団住宅群へのバスがたえず動きまわって出入りするせいか、バスの銀色の車体や、駅前広場をかこむデパートや銀行の大きな建物のガラスに日光が反射しあって、人々を落着かなくさせる。あかるいとか、近代的とか、しゃれているとか、人々はこの西口の街をそういうけれど、計子はこの西口の街を好きではなかつた。

西口からは、ガードの下をくぐって向う側の東口にまわることができた。ガード下の道の両側

にはえのころぐさややえむぐらやよもぎやからむしが腰の高さまで茂っていて、破れたマットレスやさびた三輪車や蠅のたかった塵芥を隠している。秋が深まって夏草が枯れるころ、それらはいつもむき出しになった。いまはにおいがするだけで見えることはなかった。計子が歩いているわきの草むらから、急にたくさんの蠅が音をたてて湧きあがった。まだそれほどひからびきっていない、いくらかは汁気の残っている新しい死骸、猫か犬かの、おそらく猫であろう死骸が草の底に横たわっているのにちがいない。台所から出る塵芥ではこれほどの蠅は養えない。鼻をつくにおいの激しさに、計子は走って逃げだしたくなりながら、かえって立ちどまっていた。この激しいにおいのなかに、あるなつかしさのようなものを見つけたのだった。死んだ母の顔にかけてあった白い晒布を、納棺の際にめぐり取ってにぎりしめ、その布で思わず自分の汗をぬぐったあのときのにおい。それを見つけていた。床ずれのにおいやどうしてもしみついてしまっただけのにおいになれていたはずの計子が、いきなり黄色い水を吐いてしまわずにはいられなかったあのおい。自分の体に記憶された最後の母のにおいということになるのだろうかと思ひながら、ようやくまた歩きはじめた。

ガードを出たところは、駅前を左右へびる線路沿いの道である。いくらか広い畦道を簡易舗装したといった程度の道で、ガード下と同じように両端は夏草に埋もれている。その道と直角に東口駅前、むかしからの宿場町だった古い商店街がまっすぐ遠くまでつづいていた。

計子はこの町に、煮干しを買いにきたのだった。煮干しなんか団地のスーパーにだって売って

いるのだが、母には、好きだった冷素麵のつけ汁のだしに好みがあつて、毎度この町の乾物問屋まで出てこなければならなかつた。昆布でも鰹節でもだめで、しかもその煮干しの味にもいろいろあるのだといい、母がようやく氣にいった煮干しはその店のだといはってきかなかつた。病氣が進み、体が弱つてきて食欲をうしなつた母の、なんとかたべる氣持をおこさせるのがその煮干しで作つたつけ汁の冷素麵だったのだから、しかたがなかつた。大したちがいはないのにと腹のなかで文句をいいながら通つてゐるうちに、計子自身がその味やこの町の雰囲氣を好きになつてしまつてゐた。母がなくなつてもうその煮干しでなくてもよくなつてゐるのに、今日それの切れてゐるのに氣がついてここまで買ひに出る氣になつたのだつた。

むかしからの旧街道に沿つて出来てゐる古い商店街だつた。土蔵のような漆喰造りの二階を持つ老舗の間屋がまだ何軒も残つていて小売りもしてゐた。乾物屋や海産物問屋や餅菓子屋や印形篆刻屋や鋤鋏もうつ庖丁鍛冶屋や店じゅう釘だらけの金物屋などが並んでゐる。筆屋や墨屋もある。どの店も商いは入口の土間のところに品物を裸で置いてゐるだけで、奥の一段高くなつた板敷の広い場所に何人かの職人が実際に印刻してゐたり、つづきの土間で蒸籠から湯氣を吹き出させてゐたりしてゐる。それはまるで映画の装置でも見てゐるようだつた。駅の反対側にはまるであてつけるように近代的とみんながいう新興の街が出来上りつつあるというのに、どうして今までこんなむかしのままの町が生き残つてゐるのだらう。今日は土曜日のせいか、この古い町は大変な人出である。売る方も買う方も人と人がぶつかりあうほどだ。買う方は品物をいじりまわしながらいろいろと話しかけ、売る方もいとおしそうにといいたくなるほどの手つきで品物を

見せて答えている。「これはもうお客さん、本物の利尻の昆布さね。小売りなんかできる品物じゃないんだけど。この厚さ、ほらお客さんさわってみてよ。養殖なんかのところがいいのは品がちがうんだ」。おそらく雇われている店員なのだろうが、若い男たちは得意そうに働いている。

計子はいつもの乾物屋で煮干しを買った。乾物屋の間口は狭くて、海産物問屋の店は広がった。しかし奥行きはどちらも同じのようだ。ピアノの鍵盤のような具合に、一列の家並が細く仕切られていて、鍵盤三つ分の間口を持つ店や一つ分しか持っていない店があるらしい。計子は乾物屋に行くまでに誰かとぶつかりそうになり、何回か、ごめんなさい、といった。この道は車は通れないが、自転車はよろけながら強引に通っていく。ベルが鳴らされつづけられるが誰もよけてやらない。「こんなところ、降りて押していきゃあいいのに」と誰かが大きな声でいう。自転車の男の子は、「ちえっ」といいながらやはりよろけてそのまま走り去った。大きな声を出した女と、計子は目が合った。女は汗を拭きながら、「ねえ、このくそ暑いのに」といった。その言葉があまりにも感じが出ていたので、計子は思わず笑った。

店のなかで品物の置いてある台と台とのあいだをほかの客とすれちがったとき、積んであった干瓢の束がくずれて落ちた。計子が気がつくまえに、「ごめんなさい」と、すれちがった女がいった。計子にはなく店の人にいった。「肥ってるから困っちゃう」といいながら、ほんとうに肥っている体を苦しそうにまげて拾いはじめた。計子も一緒に拾おうとすると店員がすぐきて、「すみません、やります」といつてきれいに積みあげた。その動きの若々しさに計子は見とれて

いた。別の店員が寄ってきた。

「煮干しを」

と、計子はいつもの煮干しを探したが、いままで置いてあった場所にはなかった。店員はちがう煮干しの盛りあげてある箱の前に行つた。

「それではなくて、こないだまでここに置いてあった片口いわしの」

「あ。おおい、そっちの、それそれ、早く持つてこい。切れたらすぐ足しとかなきゃ」

計子は威勢のいい小言を聞きながら、いつもの煮干しがざあつと箱のなかにあけられ積まれていくのを見ていた。店員は両手で煮干しを円錐型にならしながら、いかほど、といった。いままではいつも三百グラム買つていた。店員は紙袋に手で煮干しをつかんでいれ、目方をはかつて計子に渡した。店を出るとき何人もの店員が、ありがとうございます、といった。はずかしいぐらいだつた。これがスーパードつたらひとことも口はきかないが中身にさわることもない。自分で一袋を黙つて取つてレジに行く。レジでは値段はいつてくれるけれどもありがたいがとうございますとはいつてももらえない。煮干しの円錐型の山に蠅が何匹かとまっていた。スーパには声もないけど蠅もない。計子は蠅の方を選んだような気がした。蠅がいやだつたら西口へ行つてスーパード買えばいい。

そういうことを考えながら、計子は道をもどらずに先の方へ歩いていった。この商店街はどこまであるのか、終りまで歩いてみようと思つていた。いままでのように急いで帰る必要がなくなつたことに気がついたのでつた。